

How to start, go on, or stop in EFL Communication

口頭による英語コミュニケーションの基礎を求めて

井筒勝信／小熊 猛／金 容澤

北海道教育大学／人間文化学部国際コミュニケーション学科／ジョージア工科大学

0. はじめに

筆者らが親しく交わる日本人研究者の中には、電子メールなどでの実務上の意思疎通、私信の遣り取りでは、大変小慣れた英文を書き、その目的をそつなくこなしているながら、学会の口頭発表での質疑応答やコーヒー・ティーブレイクや懇親会での英語による意見交換に強い苦手意識を感じ、実際に英語によるコミュニケーションを積極的には取ろうとしない方が思いの外多く存在することを知っている。その一方で、日本語で会話をすると同じか、それ以上の活発さ、流暢さを持って、そうした意見交換を楽しむ方が存在することも事実である。

ここしばらくの間、筆者らは年に数回国際学会で発表する機会を与えて頂いているが、そこでは自らの発表に対する質問に英語で答え、時にはこちらから尋ね返し、他者の発表やコーヒー・ティーブレイクで英語を用いて意見交換を行うことを繰り返し経験して来た。その中で、自らは上記の後者の方々のように流暢に英語を話し、当意即妙に受け答えをしているとの自惚れは微塵もないと信じたいが、先の強い苦手意識を持つ方ほど、実際の英語によるコミュニケーションにおいて不都合や困難を感じてはならず、また英語によるコミュニケーションを積極的に取ろうとしないというわけでもないように思う。

確かに、著者らも英語を話す際、言いたいことを的確に言い当てる表現が即座に思い浮かばず、口ごもってみたり、暫し考え込んでみたりして、思ったように言葉を発し続けることが出来ないことも少なくない。しかし筆者らには、母語である韓国語や日本語を話す際にも、自分の言いたいことをうまく表現出来ず、言葉に詰まったり、言い淀んだり、言いかけた文句を途中で切り上げて、新たに言い直し始めたりと、ある意味では四苦八苦しながら言葉を紡ぎ出している実感がある。そして冷静に内省してみれば、そうした四苦八苦を繰り返していること自体をコミュニケーション上の困難さや不都合とは感じていないように思う。もし、英語によるコミュニケーションに心理的抵抗を感じるとすれば、それは寧ろ、そのような際に沈黙せざるを得なくなるこ

と、何か言葉を発しようとしても、それ自体が滞ってしまうことに起因するのではないかと考えるに到った。

改めて振り返ってみれば、筆者らは英語で話す際に、あまり頻繁に無言の間を置かず何らかの句を口にしてるように思う。母語である韓国語や日本語で話し始めようとする際、言い出しの一言や最初の言い回しがうまく出て来なければ、*jeo... geueo-nigga... geugeon...* (あの ... だから ... それは ...) とか、*eeetto... maa sonoo... nan-te iu-ka... sore-tte nanka koo...*¹ などと言って間を繋ぎ、自分の考えや思いを漸く表現し始めた後、またその先を続けるのに困れば、*geunde... nan yeogsi... jeo... geugeon... mweo geunyang... issjana... gudi malhajamyeon...* (でも ... 私やっぱり ... あの ... それは ... なに、ただ ... ねえ ... それこそ) あるいは *demo... yappari... anoo... sore-tte... maa... it-te mireba... nee... sorekoso...* などと言い繋ぎながら、言いたいことを表現する言い回しを探そうとする。それと同じように、英語でコミュニケーションを取ろうとしながら、直ぐさま、言わんとすることが口を突いて出て来ない時、先ず最初に *so uhm... it's like uh... you know...* などと言って、言いたいことがあるということ話し相手に伝えるように思う。やがて表現したいと思っていることを一句一句に紡ぎ始め、暫く発話を続ける中でも、時折次なる句が瞬時には思い付かなかったり、幾つか浮かんだ言い回しの間で迷ったりする。そうした折々には、*well... what can I say... you know... it's uhm... I mean...* などと口走りながら、自らの考えや思いを表現するのに当座間に合わせとなりそうな表現を探そうとしているように思う。

これらの表現は、一般的には流暢ではないこと (disfluency) の特徴として受け止められているようだが、実際には母語話者も日常の会話においては実に頻繁に用いている。それどころか、韓国語、日本語、英語を外国語として用いる話者 (以下ではそれぞれ KFL、JFL、EFL 話者と称することとする) がこれらの表現を用いると、それを聞いた母語話者は流暢な外国語話者であるとの印象を持つことが少なくないと言う。この点では、外国語話者の流暢さ

(fluency)を印象付ける一大要素と言っても過言ではあるまい。こうした内省と考察から、口頭での英語コミュニケーション上達の一步は、これらの表現のマスターにあると言っても強ちの外れではないことが理解されよう。

また、冒頭で述べたような状況を受けて、ここ1年ほどの間、英語による意見交換に強い苦手意識を感じ、英語でのコミュニケーションを積極的に取ろうとしないタイプの研究者たちと日本語で会話をす際には、折に触れて今言ったことを英語で言うとしたら何と言うかと尋ねることを試みて来た。例えば、「あっ、雨降り出したね」と言うのを聞いて、それを英語で言うのと尋ねてみる。すると、彼らは即座に *It started to rain*, *It began to rain* などと答えて見せるが、同時に「あ、でも *It started raining* の方がいいかな」、「*Oh* とか *Look* って言ってからの方がいいのか」、「でも、*It's raining* って言った方が状況に即してるかも」などと言って逡巡し始めることもしばしばである。これらはもちろん、いずれも文法的であり、どれを言っても発話の意図は聞き手に伝わるだろう。実際、母語である日本語では、類似した複数の言い回しの中で、そのように選択に迷うようなことは通常あるまい。例えば、友人と戸外に出た話者が雨に気づいて、それを友人に伝えようとして「あっ」と声を発した瞬間に、「雨降り出したね」と言おうか、「雨降って来たね」と言おうか、あるいは「雨降ってるね」と言おうかと二の句を継ぐのに戸惑うということがあるだろうか。そのようなことは通常あるまいと思われる。

英語によるコミュニケーションにおいて、ある意図を持って一定の事柄を聞き手に伝達しようとする際に、筆者らはそれほど酷く躊躇することはないように思う。もちろん、時によって複数の表現が思い浮かび、一瞬どちらにしようか迷うことはなくもない。そして、うまく選び損ねると、時に思い浮かんだ二つの表現が相半ばするような表現をうっかりこさえてしまって、途中で言い直すようなこともあるような気がする。けれども、基本的には思い切っていずれかの言い回しを短時間で選択し、それをともかく発して聞き手に聞かせることを優先する傾向があるように感じる。

ここに例をあげたような複数表現から素早く選択して発する傾向は、一見すると粗忽で思慮の足りないことのように受け取られるかもしれない。しか

し、コミュニケーションが一定の流れをもって実現するという一般的な認識に従えば、その結果、当たり前とも遠からぬ言い回しになることが多く、相半ばする二つの表現を発してしまって言い直すようなことがあったとしても、それが訥弁 (disfluency) として受け止められるとは考え難い。上で最初に論じた点と同様に、これもまた母語話者が日常の会話において頻繁にいわば実践していることであり、EFL話者が言った場合、それを聞いた母語話者には寧ろ流暢な外国語話者であるとの印象を与えることも少なくはなかろう。従って、複数の表現が思い浮かぶこと自体は英語でコミュニケーションを行う上で決して不都合なことではなく、ましてや的を射た表現を選択出来ることすら必ずしも必要な訳ではないと言える。寧ろ、その際とりあえず、いずれかの表現を選んで、先ずはそれを発することが出来れば、それもまた外国語話者の流暢さ (fluency) を印象付ける一要素となると言って良かろう。口頭での英語コミュニケーション上達の鍵がここにも存在することが分かる。

第一に例示した種類の表現力は、対話を始め、続け、上手に立ち止まりながらも、また首尾よく歩き始めるための基本的なコツないしは手法と言って良いだろう。これに対して、第二の例で説明に用いた「自分の言いたいこと」、「自分の考えや思い」に相当する具体的な伝達内容を英語で表現する力も必要となる。そして、そのような表現力を支える知識と技術は上記のコツないし手法とは幾分性質の異なるものである (Kaltenböck et al. 2011; Heine et al. 2013, 2014; Kaltenböck and Heine 2014; Haselow 2016)。通常は、前者を語用論的な要素と捉え、後者を文法的な事柄と捉える向きが多かったが、どちらにも文法的な要素は含まれ、いずれにもいわゆる直示表現に相当する語用論的な項目が伴うことから、それらの区別は言語形式的にも意味的にも極めて難しい。

こうした背景から、以下の議論は、伝達内容の等価性に着目して、口頭による英語コミュニケーションで有意義な句の単位をなし得る度合いの高いものをまとめ上げる仕組みに概ね限定する。いわゆる文法的な事項と見做される側面に関しては、具体的な内容を表現するための核となる知識と技術を略述する。一方、従来語用論的な要素と見做される側面については、発話時に話し手が抱く発話場面の概念化

(具体的には、話し手(と聞き手)自身、その意図する談話的機能、それを反映する行為、発話の空間と時間などの概念化)のうち、「話し手の意図する談話的機能」に絞って、それらを逐次モニターするコツないしは手法の素描を試みる。

1. Radical Communicative Grammar

本稿は、談話語用論的な知見を援用し、英語を母語としない(特に西洋語ではなく日本語や韓国語などの東洋語を母語とする)学習者が英語のスピーキングを効果的に身に付ける上で極めて重要と思われる観点を幾つかの文法項目に着目して提示する。そうした観点からやがてまとめられる、本稿が提案する文法は、夙に Communicative Grammar と呼ばれて来た研究を引き継ぐものとも位置付けられる。一方で、実用性に加えて学習の即効性をより一層重視することから、主に書き言葉に依拠して組み立てられて来た文法とは著しく趣を異にする側面を伴うため、特に区別して Radical Communicative Grammar (以下適宜 RCG とも) と称することにする。

本稿で提案する RCG は、英語学などで提供される文法的知識ではなく、実際に英語で発話を組み立てていく際に用いられる過程的ないし作業的な文法的知識である。前者は、一般的に宣言的知識(declarative knowledge)と呼ばれるものに属するのに対して、後者は手続的知識(procedural knowledge)と呼ばれるものに分類される点で性質が大きく異なる。こうした理由から、RCG が提供しようとする文法は、静的な文法として英語の背後にある意味・機能体系を参照しながらも、そこに見出される意味・機能的な対立を具体的な使用のパターンと個々のパターンの順序付けによって学習者に動機付け、発見学習的な過程を大いに活用しながら、使用のパターンとして動的な文法を身に付けることを促すものである。

使い古された比喩を借りれば、英語を話すと言うことは、ある意味で、英語を書くことよりも遥かに、様々な人間身体技能に似ていると言え、自転車の運転や楽器の演奏といった活動に準えることも出来る。スピードを上げたいと思えば、ペダルを片足ずつ踏み込み、スピードを落としたと思えばブレーキを握る。奏でるコード(和音)を変えたいと思えば、ギターフレットの側で握った指の配置を即座に改め、あるリズムで弾いていたギターの音を止

めたいと思えば、弾いていた方の手の小指とその付け根部分を弦に押し当てる。いわば、これら身体的動作が運転者、演奏者の意図する機能に合わせて選択され実現するように、母音や子音の複雑な組み合わせで形作られる句の一つ一つは、話者が意図する談話的機能、語用論的な目的を実現するために選択されて実行される。従って、それら句の一つ一つは、英語を母語とする話者の中で、その都度組み立てられるのではなく、既にある程度は予め一まとめにして蓄えられているに越したことはない²。そして、慣用句(idioms)や成句(set phrases)に代表されるように、あるものは確かにそうした形で蓄えられていると見られる。しかし、その一方で、ある部分は予め一まとめにして蓄えられている程度が高く、また別の部分は半ばまとまりを成し得るとしても、必ずしも母語話者の知識の中で句全体が一まとめにして蓄えられているわけではないというものも少なくない。

そこで、本論では母語話者の中で予め一まとめにして蓄えられていると見られる句、あるいは句全体ではないにしろ、そうした一まとめにして蓄えられている程度が高いと見られる部分に着目し、それらをつぶさに拾い上げ、注意深く整理することで、実際に英語で発話を組み立てていく際に用いられる過程的ないし作業的な文法的知識としての RCG の姿を素描する。そこに体现される動的な文法は、談話的機能、語用論的目的に支えられた具体的な使用のパターンと個々のパターンの順序付けを通して意味・機能的な対立として体得されるものであると考える。

2. 英語で発話を始め、立ち止まり、続けるための表現力

まず始めに、セクション 0 で「対話を始め、続け、上手に立ち止まりながらも、また首尾よく歩き始めるための基本的なコツないしは手法」として言及した表現力を支える根源的要素について論ずる。

2.1 話し始め

Tagliamonte (2019) は、冒頭で *How do you start a sentence?* という問いを立て、(1)のように文を組み立てると一般に説明されるが、実際は(2)のように語用論的標識(discourse marker)を前置き(preface)することが多いことを描いて見せた。Tagliamonte

は、更にカナダでの英語使用に関する資料を基に、若い人ほど、それも女性の方が多く、そのような話し始めの語用論的標識として *so* よりも *like* を用いる傾向を示すと報告している。

- (1) **Subject... Verb... Object.**
(Tagliamonte 2019: A slide under the title “How do you start a sentence?”)
- (2) a. **You know**, I like cats.
b. **So**, Sali likes cats.
c. **So, you know, I think** my daughter likes cats.
(ibid.)

これらの語用論的標識は、Leech & Svartvik (1994) が格式張らない会話 (informal talk) に典型的に見られる特徴の一つとして挙げている false starts と共起しやすい³。(3)に引用したように、この特徴の名称並びに定義は「話の始め方を誤った」という印象を与えやすく、口頭によるコミュニケーションで避けなければならないことを含意するように誤解されかねない。しかし、Leech & Svartvik が必ずしもそのようなことを意図していないことに注意する必要がある。

- (3) **false starts**: the speaker may fail to complete a sentence, or lose track of the sentence and mix up one grammatical construction with another:

*I mean you know what [g] getting up Sunday's like anyway and - I'd - I was behind in any case
and I I get really erm - you know when when I'm trying to cook - and people come and chat I I get terribly put off*

Leech & Svartvik (1994: 11)

Leech & Svartvik (1994: 10-11) が、「書く際には、書いたことを変更したり、確認したり、書き直したりする時間があるが (we usually have time to revise, check and rewrite what we have written)、話す際には自分の言おうとすることを予め準備する時間はなく、話しながら伝えたいことを形作らなければならない (we have no time

to prepare what to say in advance, but we must shape our message as we go along)」と述べていることから読み取れる通り、false starts を含めた informal talk に典型的な特徴は、口頭による英語のコミュニケーションを実践する上で EFL 話者に必要となる知識であり、技術であると言える。

2.2 言い淀み、言い惑い

2.1 で述べたように、それが false であろうがなかろうが、話し始めた話者は、時折言い淀みながら、その発話を続けることが少なくない。日本語では *ee*、*etto*、*ano*、*maa*、*sono*、*nanka*、*koo*、韓国語では *eo*、*jeo*、*issjanha geu*、*mweonga*、*ireon*、英語では *uh*、*uhm*、*well*、*like* などがそれに相当する。言い淀みは、いわば話者自身が自らの思いや考えを表現する言葉の選択に窮していることを聞き手に示したり、想起してはいるもののうまく言葉で描写することが出来ないものを漠然と指示したりする際に生じると一般に考えられている。言い淀みの表現は、それ自体具体的な意味が希薄であるか、もしくは談話語用論的な機能しか持たないものが多いと言われる。そのため、母語話者の中には、これらの表現を多用すること、あるいは使用すること自体が流暢さを欠くことのように感じる人も少なくない。ところが、それとは対照的に JFL、KFL、EFL の話者がこれらの表現を使いこなしているのを耳にすると、多くの母語話者が流暢な外国語話者であると感じるのも事実である。

話者が自らの思いや考えを言い表す言葉の選択に窮していることを聞き手に示すという機能は共通するものの、言い淀みの表現に比べてより具体的な意味を持つ表現がある。日本語の *nanteiuka*、*nanteittaraiikana*、*dooittaraiikana*、韓国語の *mweora* ((go) ha) *myeon joheulgga*、*mweora haeya joheulgga*、*mweorago haeya dwaeeji* や英語の *what can I say*、*how can I put[say] it* などがその典型的な例で、言い惑いの表現と呼ぶことが出来る。しかし、これらの表現を多用ないし使用するために流暢さを欠くと判断する母語話者は、言い淀みの表現を多用する場合に比べて、ずっと少なくなるように思われる。それゆえ、JFL、KFL、EFL の話者がこれらの表現を使いこなすのを目の当たりにすると、母語話者の多くは流暢な外国語話者であると感じるようである。

2.3 思考整理

言い淀み、言い惑いの表現が、話者が自らの思いや考えを言い表す言葉の選択に窮していることを聞き手に示すという機能を有するのに対して、思考整理の表現と呼べる語用論的標識も存在する。それらは、言葉の選択に窮しているというよりも、話者が自らの思いや考えをどのように扱っているかを聞き手に伝達する機能を果たす。

日本語の *nandakke, nandaroo, ittemireba, tatoeba, kantamnieba, yoosurumi, hayaihanasi, datte, nazekatteiuto, dakara, sorede, demo, yappari, issonokoto, butyake, hakkiriitte, syooziki (itte), hontoowa, kekkyoku (notokoro), syosen, aruimi (de)*、韓国語の *mweoyeossji, mweoyeossdeora, mweoji/mweolgga, malhajamyeon, yereuldeureo/yereuldeulmyeon, gandanhimalhamyeon, yoyaghameon, waenyahameon, geureonigga, geurigo, geureonde, geureohjiman, yeogsi, charari, soljighimalhae, soljighimalhamyeon, sasileun, gyeolgug, eochapi, eoijaessdeun, eoddeohgebomyeon, eoddeoneuimironenun/eoddeoneuimieseoneun, dallibomyeon*、英語の *what was that, let's say, for example, in a nutshell, simply, in short, that's because, one of the reasons is that, that's why, (and) so, but (nevertheless), still, I'd (rather) say, anyway, after all, frankly, honestly, in fact, finally, in a sense* などがそれに相当する。これらは、見方を変えれば、話者による意識の流れ (stream of consciousness) の自己実況中継 (moment-by-moment self-report) と言っても良からう⁴。

言葉の選択に窮するという状況は全ての話者にあり、また自らの思いや考えをどのように扱っているかを話し手が聞き手に寧ろ積極的に伝えようとすることも少なくない。これら自然な発話活動に見られる発話の方略 (strategy) を JFL、KFL、EFL の話者が使いこなせば、母語話者の多くはそれを流暢な外国語話者であると感じるのは当然であろう。

2.4 思考・発話の実況中継

話者は、発話を行なっていくが、絶え間なく何らかの思考を働かせ続けている。会話においては話し手と聞き手がめまぐるしくその役割を交代することが十分にあり得ることを考えれば、ここで言う絶え間ない思考は両者に当てはまる。話者は、自分が発話を続けていることを相手に伝える (signal) ために、自らの思考や発話をいわば実

況中継 (live report) する。英語の *I mean, I think, I guess, let me see* などの表現は、そのような目的で用いられると考えられる。同時に、話し手はやはり自らの発話継続を示すために、聞き手の思考も実況中継することがある。*you know, you see, you never guess* などは、そのような聞き手の思考の実況中継に用いられていると見る事が出来る。

これらの表現は、*that* 節などの補文を従えるものとして扱われる主節用法の場合とは異なり、思考・発話の実況中継の語用論的標識として用いられる場合には否定されることがないという特徴を示す。従って、*#I don't mean, #I don't think, #I don't guess, #don't let me see, #you don't know, #you don't see* は、通例、語用論的標識として用いられない。

日本語は、これらの英語表現と文字通りの意味で重なるような思考・発話の実況中継の語用論的標識を具備してないようである。その代わりに、いわゆる終助詞、文末詞と呼ばれる表現形式がそれらの役割を担っていると考えられている (Maynard 1993; Onodera; Shinzato 2007; Izutsu and Izutsu 2017)。日本語の *yo, ne, sa, wa, zo, nda, no, (n)daro(o), (n)desyo(o), (n)zyan(ai)* は、話し手が自らの思考内容・発話内容を話し手の想定、聞き手の想定と照らし合わせて、その一致、食い違いなどについての含意を聞き手に伝える役割を果たしていると考えられる。そのため、*You know, it's raining outside* と *You see, it's raining outside* のニュアンスの差は、日本語の *soto-wa ame hutteru-ne* と *soto-wa ame hutteru-yo* の違いと重なる。これとは反対に、日本語で *(n)daro(o), (n)desyo(o), (n)zyan(ai)* などを用いて行われる聞き手への確認が、英語のいわゆる付加疑問文、発話末で用いられる *right?, yeah?, huh?, you know?* などと意味や機能の面で類似性を示すことも知られている。韓国語にも、*ji, ne, gun, lgga* などの終結語尾があり、ここで見た英語の語用論的標識や日本語の終助詞・文末詞と類似した意味機能的側面を見せることが知られている。

これらの表現も広義の語用論的標識と考えられ、既に前で見た表現と共に、話し手による自らの、あるいは聞き手の、思考や発話をいわば実況中継するような働きを担っている。本セクションの冒頭で述べたとおり、発話に従事している者は、発話を行なっていくが、絶え間なく何らかの思考を続けている。これは会話であれ独話であれ等

しく当てはまる事実であり、特に会話においては話し手・聞き手として便宜上区別され得る発話従事者の双方に当てはまる。この事実を前にしても、やはり話すという行為は本来「話者自身が自らの思いや考えを表現すること」にその中心があり、言葉の選択に窮して言い淀んだり言い惑ったりした際に「致し方なく、いわば間を埋めるための言葉 (filler)、言葉の選択が実現するまでの繋ぎ言葉 (transitional expression) などを用いて時間を稼ぎ、間を持たせようとするものだというのが一般的な見方ではあるまいか。

しかし一度立ち止まって良く考え直してみたい。発話従事者は、絶えず思考を続ける中で、自らの思いや考えから表現したい(会話においては聞き手に伝えたい) 思いや考えを選んで、それを言葉で言い表そうとしているというのが事実だとすれば、話すという活動の大半は寧ろ「絶えず続く思考とそれに伴う実況中継を行うこと」にあり、その合間合間で「伝えたい自らの思いや考えを表現する」ことが行われているに過ぎないということに思い至らないだろうか。この理解に立脚すれば、英語が話せるようになるために有効なのは、絶えず続く思考とそれに伴う実況中継を英語で行う表現力を養うことであると帰結される。Radical Communicative Grammar の立場は、話すという活動の本質を見据え、話すという行為について、このような理解とそこから得られる論理的な帰結に出发点を置いている。セクション0で最初に言及した「対話を始め、続け、上手に立ち止まりながらも、また首尾よく歩き始めるための基本的なコツないしは手法」を支える最も重要な要素はここに存する。

3. 伝達内容を英語で言うための表現力

本セクションでは続いて、セクション0で「具体的な伝達内容を英語で表現する力」として言及した知識と技術の基礎を素描する。前セクションでは、話すという活動の大半が「絶えず続く思考とそれに伴う実況中継」にあり、その合間合間で「伝えたい自らの思いや考えを表現する」ことが行われているとする見方について述べた。ここで言う「伝えたい自らの思いや考えを表現する」という部分が上記の「具体的な伝達内容を英語で表現する」ことに相当するが、Radical Communicative Grammar が重要視する実用性と学習の即効性という点から、学習の

最も初歩の段階で扱う知識と技術は可能な限り少なく簡素なものに限定される必要がある。そのため、本稿ではいわゆる *be* 動詞の理解、人称代名詞の使用という2点に絞って以下でその概要を述べたい。

3.1 いわゆる *be* 動詞の理解

be は、従来の英語学習において、人称、数、時制の点から概略次のような分類を受けて来た。このような表は *be* には12種類の場合があるという印象を与えかねないが、本質的な理解として、実際には *am*、*is*、*are*、*was*、*were* の5種類しか存在しないという事実に出発点が置かれるべきである。

表1 いわゆる *be* 動詞の語形

	現在		過去	
	単数	複数	単数	複数
1人称	<i>am</i>	<i>are</i>	<i>was</i>	<i>were</i>
2人称	<i>are</i>	<i>are</i>	<i>were</i>	<i>were</i>
3人称	<i>is</i>	<i>are</i>	<i>was</i>	<i>were</i>

更に、*am* は主語に *I* 以外を取り得ないことを考えれば、*I'm (I am)* は一次的に発話上一つの単位 (communicative unit) として扱うべきである。*I* と *am* という二語として分析されるのは、あくまでも二次的な *I was* との対比においてのみである。これに対して *is* と *are* は、主語として共起する代名詞の可能性がそれぞれ *He*、*She*、*It* と *You*、*We*、*They* のように三つずつあることから、*He's*、*She's*、*It's (He is, She is, It is)*、*You're*、*We're*、*They're* を直ちに *I'm* のように一単位と見做すことは難しい。それぞれのグループに *'s* と *'re* という共通点が見出せれば、代名詞と *be* の分析性は自ずと高まる。当然 *is* と *are* は主語代名詞からはある程度独立した単位として受け止められやすくなる。

過去の場合も同様に、*I was*、*He was*、*She was*、*It was* と *You were*、*We were*、*They were* が範列的な (paradigmatic) 関係で提示されれば、それぞれにおいて *was* ないし *were* が共通していることが自ずと気づかれるに至る。つまり *was* と *were* は、それぞれが共起し得る代名詞とはある程度独立した単位として (*I'm* を一単位とするのと同じ分析性で) 扱われることになる。これによって、いわゆる *be* 動詞の体系的理解は、表2に示すような五形式に集約される。

この表には単数の *you* の場合が欠けているとの反

表2 いわゆる *be* 動詞を含むコミュニケーション上の最小単位

現在		過去	
単数	複数	単数	複数
<i>I'm</i>	(You/We/They)'re	(I/He/She/It) was	(You/We/They) were
(He/She/It)'s			

論があり得るが、歴史的もしくは方言的形式の *thou* を除けば、英語という言語の文法体系上 *you* に関しては単数複数を区別しないという事実⁵に留意する必要がある。便宜的な解説の可能性は複数あるが、英語では *you're* は本来複数標示の形式であり、それを単数の聞き手にも転用しているとするのが、言語史にも忠実な説明ではあるまいか⁵。

しかしこの時、セクション0の最後で述べた発話場面の概念化 (speech event conception) の観点から見ると、概念的にも談話語用論的機能からも優位なのは、何よりも話者自身に言及する *I'm* であり、次に対話者として *You're* であることは明らかである。従って、スピーキングの学習においては、これら二つの使用を優先し、それらを用いた表現の習熟がある程度定着した段階で、それ以外を用いる次なる学習段階に進むことが相応しい。

口頭による英語コミュニケーション学習の最初の段階に教授者から学習者に示される表現は、教授者が自身について語る *I'm...* であり、次に教授者が学習者に問いかける *Are you...?* となることが想定される。当然この段階で学習者が教授者の問いかけに答えるためには、何らかの応答詞 (responsive token) が必要となる。教えられなくても *Yes* や *No* と答える学習者もいるかもしれないが、そうでない場合は首を縦や横に振って見せながら *Yes or no?* と促したりすることも可能である。

これが定着して来たら、次は学習者から質問を発してもらい、教授者がそれに答えるという対話の形式に移行する。既に導入された補語の表現 (いわゆる第二文型) を用いて学習者が *Are you...?* と尋ねる度に、教授者は *I am* または *I'm not* と盛んに答えて見せる。この繰り返しの中で学習者に気づいてもらうことを期待しているのは、それぞれの場合に *am* と *not* が必ず下降音調 (falling intonation) を伴って強勢を受けるという点である。ここでは、これらの語に強勢が置かれない **Yes, I'm* や **No, I amn't* が生じないことを音韻的な内省から後に気づける可能性にも期待をしている。

学校のように通常個別指導を旨としない教育現場では、*I* と自称する教授者が *you* で言及するのは多くの場合において授業に参加する児童・生徒全員である。このように *you* の指示対象が第一義的に複数であるという点も、ここでの考察の趣旨に合致する。*We're* や *They're* との対比から *You're* の *are* が独立した要素として分離された際、複数主語を標示する *be* の形式としての理解が成立しやすくなるからである。

この時点で、*I'm* と *You're* の対立は「話し手である自分 (単数)」と「聞き手である相手 (複数もしくは単数)」として概念化されれば、のちに *am* に複数主語を立てることや、*are* に単数主語を立てることに概念的な齟齬を感じ、それによって不適切な **We'm* (**We am*), **You'm* (**You am*), **He're* (**He are*) などの形式は現れにくくなるか、現れても修正しやすくなると思われる。一方、*am* が単数であるとの理解から **He'm* (**He am*), **She'm* (**She am*), **It am*⁶ が生起することを懸念する向きもあろうが、*I'm* がそれ以上分析されない一単位として認識されていれば、その分だけ、そうした不適切な形式の生起は避けられやすく、生じても修正しやすいと思われる。

3.2 人称代名詞の使用

代名詞は通常の発話においては、助動詞、本動詞に寄り添う形で発せられる。セクション3.1で見た *be* の場合に、*I'm* を一次的に、一方でそれ以外の (*He/She/It*)'s, (*You/We/They*)'re, (*I/He/She/It*) was, (*You/We/They*) were を二次的に一単位として扱うことを指摘したのも同じ音韻的な事実⁷に依拠している。従って、*be* の場合に限らず、主要な助動詞ないし使用頻度の高い動詞とそれらの主語代名詞の組み合わせは、一単位として記憶され、表現したいと思う内容に応じて即座に発することが出来るのが、スピーキング力の向上に貢献する。以下では、この一単位として記憶される (助) 動詞と代名詞の組み合わせを「主 (助) 動句」と呼ぶことにしよう⁷。

先ず問題となるのは、ここで言う一単位として記

憶される(助)動詞と代名詞の組み合わせの中で、*I, He, She, It, You, We, They*が対等に扱われるべきかどうかという点である。結論から言えば、*I'm*を第一に、*You're*を第二に優先すべきと上で述べたのと同じ理由で、*I can, I'll (I will)*などを第一に優先し、次に*You*を主語にとる形を優先することが望ましい。しかし、後者の場合は、*You can, You'll (You will)*のような平叙の形式よりも、*Can you?, Will you?*のような疑問の形式を最初の段階では用いることが相応しいように思われる⁸。上で見た*be*についても同様なことが言え、従って、ごく初期の段階では、*You're*よりも*Are you?*の形式を盛んに用いることが推奨される。

このような理由から、*He[She/It/We/They]will*や*He[She/It/We/They]can*は、*I*や*You*を主語とする「主(助)動句」を用いた練習が盛んに行われたのちに導入されることが望ましい。*Will he[she/it/we/they]?*や*Can he[she/it/we/they]?*のような疑問形の導入は更に遅らせて良いだろう。寧ろ、先行発話に*He[She/It/We/They]will*や*He[She/It/We/They]can*が用いられた際の応答(いわゆる response ないしは backchannel)として、*Oh, will he[she/it/we/they]?*や*Oh, can he[she/it/we/they]?*を導入するのが合理的であり、そのような対話練習の中で盛んに用いることを通して定着が図れると思われる。

こうした先行発話に対する応答練習についても、*He, She, It, We, They*を伴う「主(助)動句」に先んじて、*I*と*You*を含む「主(助)動句」を用いて盛んに練習を積んでおくことが肝要である。具体的には、学習者が*I'm..., I will..., I can...*のような発話をする度毎に、それに対して教授者が*Oh, are you?, Oh, will you?, Oh, can you?*のように応答することを繰り返すことによって、*I*と*You*を含む「主(助)動句」によるコミュニケーションに慣れ親しむことが出来る。こうして定着した対話のパターンとそれに用いられる「主(助)動句」のパターンを、*He, She, It, We, They*を伴う「主(助)動句」の場合に転用することで、「主(助)動句」を用いた対話全般に習熟する道が拓ける。

同様な点は、本動詞を含む「主(助)動句」構造にも言えるが、幾つかの理由から、助動詞を含む場合とは少々手順を違える必要があると思われる。その理由の一つは、*I think, I see, You know, You see*のように、これらの「主(助)動句」構造には、い

わゆる語用論的標識(pragmatic marker)ないしは談話標識(discourse marker)としての用法を持つものが相当数存在することである。今一つの理由は、仮に*Oh, do you think so?, Do you know it?, Do you see it?*のような形式を用いた練習を始めるとすれば、それに先んじて*Do you?*の形式が導入されている必要があるという点である。

こうした考察から、本動詞を含む「主(助)動句」構造を導入する際は、*I know..., I have...*のような平叙の形式とそれに対する応答としての*Oh, do you?*という形式を導入して、それらを用いた練習を積むのが望ましく思われる。更に、対応する助動詞表現*I do*を導入するとすれば、教授者が自然な場面に応じて*I do know...*や*I do have...*あるいは*I do like..., I do love...*のように助動詞*do*を含む「主(助)動句」構造を補助に用いることでも可能であろう。また、学習者の*Oh, do you?*という応答に対して、*Yeah[Yes], I do.*と応じる姿を見せることでも、*I do*の使用に触れる機会を増やすことが出来る。

4. 実践的発話練習の事例

ここでは、前セクションの二つのサブセクションで略述した知識を用いることで実現可能となる具体的な言語活動について考えてみたい。最も初歩的な内容として「自己紹介と他者の紹介」を取り上げた後、中級的な内容を扱う「趣味への言及」に進み、更にそうした初・中級の両要素を加味した内容として「方法や手順の説明」について筆者等の見解を示したい。

4.1 自己紹介と他者の紹介

最初に、教室などでの発話活動として、最も原初的な自己紹介の場合を考えてみよう。(4)に例示されるように、ごく一般的な英語の自己紹介の発話内容としては、初対面向きの挨拶、名前、出身地、家族構成、趣味などが考えられる。ここで用いられている表現は、中学校の1年次に学習する内容でその殆どが賄えると思われるが、それらについても自在に用いるほどには十分に習熟していない生徒(これは中学校はもちろん高等学校においても見られることだが)にあっては、この程度の自己紹介であっても、先に文章を作って書き取り、それをいわば暗唱するようなやり方でなければ、発話の実現出来ないということも十分にあり得よう。

- (4) Hi, my name is Shane, Shane Michael Peterson a...nd uh I'm fro...m the United States. My mom and dad still live in America. They live near Las Vegas! My sister, my little sister, she li...ves in the great state of Pennsylvania! And I haven't seen her for a long time.... But I live in Seoul, South Korea. A...nd uh, I love it here. I'm having a great time. It's just me and my son and uh... we're very happy! (Learn Easy English--Self Introduction in English, partially transcribed)

そのような条件にあっては、練習の最も早い段階で使用する知識・技術を、ある程度絞り込むことがやはり有効であろう。英語による会話練習を目的とする授業であれば、先ず第一に教授者自らが自己紹介をすることから始まり、当然、それが学習者にとっての最初のモデルケースとなる。従って、教授者自身が予め使用する知識・技術を絞り込んで使用して見せることで、学習者はそれを模倣する形により簡素で少ない知識・技術による発話を身に付けやすくなる。

例えば、ごく初歩的な学習段階を想定した場合、用いる表現を先ずは *I'm* のみに限定して、自己紹介を組み立てて学習者に示すことが可能である⁹。(4)の *Hi, my name is...* は、*Hi, I'm...* のように *be* を使って表現することが出来るため、教授者は冒頭の二文で示される内容を *Hi, I'm Shane, Shane Michael Peterson and I'm from the United States.* のように *I'm* のみで表現して見せても良からう。更に、*I'm an English teacher at a junior high school.* や *I'm on the baseball team and I'm a pitcher there.* のように、やはり *I'm* を用いた表現を続けて見せることも出来る。(4)の後半で発せられている *But I live in Seoul, South Korea.* も、やはり *But I'm here in Seoul...* と表現することが出来、その後の *I love it here.* に続く、*I'm having a great time.* も *I'm* に始まる表現である¹⁰。

このように、自己紹介が最初の段階では *I* を主語にした *be* の「主(助)動句」で殆どを済ませることが可能であることから、学習者が教授者の発話モデルを参照して英語で自己紹介をする段では、一先ず *I'm* までを発することから始めると良い。その後の表現が直ぐに口を突いて出なければ、セクション2で導入した「言い淀み」、「言い惑い」、「思考整

理」、「思考・発話の実況中継」のための表現を活用して、言葉を探し、選択し、また「具体的な伝達内容」を表現し始めれば良いことになる。教授者は、学習者が訥々と発する句を傾聴していることを示す非言語的表現と共に、*mhm* や *uh-huh* あるいは *Oh, yeah?* や *You are?* などを軽い上昇音調で発することで相槌を打ったり、発話を進めることを促したりすることが大切である。

次の段階に進んで、三人称の導入が可能となった時点では、(4)の *My mom and dad still live in America. They live near Las Vegas! My sister, my little sister, she lives in the great state of Pennsylvania!* も同様に扱うことが出来よう。これらは、*be* を用いて *My mom and dad are still in America. They are [Their house is] near Las Vegas! My sister, my little sister, she's in the great state of Pennsylvania!* のように言い表すことが出来る。(4)の最後で発せられている *It's just me and my son and we're very happy!* は全て *be* による表現である。これら三人称が持ち込まれた時点で、文字通りの自己紹介から他者の紹介という局面にも入り込んでいるということに注意されたい。つまり、自己紹介で家族や親しい人、ひいては好きな歌手やスポーツ選手について語るとなれば、それは自己紹介であるのみならず、それらの人を紹介するにせよ、それらの人について説明をするという活動にもなり、そのための表現の学習にも繋がるということである。

なお、(4)の中程に現れる *I haven't seen her for a long time.* は、完了形を含むことから中学校の3年次まで親しみのない難易度の高い表現かもしれないが、それと共に学習する *since* を使うとすれば、*It's a long time since she was with me.* や *It's a long time since she and I were together.* あるいは *It's a long time since she and I were near Las Vegas.* のように *be* を用いて言うことが可能である。このように三人称が導入された後も、やはり教授者は先に触れた非言語的表現と共に *mhm*、*uh-huh*、*Oh, yeah* などによって相槌を打ち、発話を促すことに努めることになるが、とりわけ学習者の発する句に良く耳を傾けながら、*It is?*、*They are?* ないしは *Is it?*、*Are they?* などを適切に選び、軽い上昇音調で発することで同様な受け答えをしつつ、これらの主(助)動句の使用を学習者に盛んに示すことが重要である。

4.2 趣味(好きなこと)への言及

自己紹介などで、いわゆる趣味について言及する場合を考えておきたい。これは、以上の説明で見て来たように名前、出身地、家族構成、職業(身分)などと並んで、自己(ないしは他者の)紹介で取り上げられやすい項目ながら、自然な英語を身に付けるという点では最も難しい内容の一つでもあり得る。初学の段階ではなく学習のある程度進んだ段階で有効な内容と言えるかもしれない。良く知られているように、*My hobby is...* という言い回しは、*What is your hobby?* という質問と同程度に母語話者にとっては不自然に聞こえる表現である¹¹。これまで紹介してきたように、*be* を用いた表現に最初の段階での使用を限定しようとする、*One of my hobbies is...* という、ごく初歩的な学習段階ではやや複雑に感じられかねない表現を用いる必要が生じる。

一方、EFL の話者が用いてしまいがちな *What is your hobby?* に対して、母語話者が普通用いるとされる表現が *What do you do in your free[spare] time?* もしくは *What do you like to do?* であることを考慮すると、いわゆる疑似分裂文などに用いられる疑問詞節を採用するのが得策のように思われる。例えば、*One of my hobbies is...* ではなく、*What I do in my free[spare] time is...* を用いて教授者は自らの趣味に言及するのである。この文法項目は、*I'm a teacher. That's what I am.* や *You're students. That's what you are.* のような形で自己紹介の随所に忍ばせることが可能である。また、飼っている犬や猫などの写真を見せて *This is what I have at home.* と話したり、*What I do every morning is walking the dog.* や *What I like the best is playing with the cat in the living room Sunday mornings.* のように自己紹介の早い段階で盛んに用いて聞かせるのも一つの方法である。

こうして予め導入しておいた疑問詞節を活用して、教授者は *Say what you do in your free[spare] time.* や *Tell me what you do in your free[spare]time.*、*Say what you do Sunday mornings.* や *Tell me what you usually do Sunday mornings.* などと投げかけて、*What I do is playing with my cat in the living room. How about you?* あるいは *What I like is to play with my cat in the living room. What about you?* などと続けることで、更に多くの例に触れてもらえるであろう。この際、教授者は学習者に尋ねている仕草を(眉毛を上げた

り、片手を軽く差し出すなど)して、一人一人の中で *What I do is...* という発話の胎動が生じやすくなるよう工夫が必要となろう。

更に先へ進んだ学習段階では、*What I like to do is...* の表現を用いて教授者が趣味について導入し、学習者もそれをモデルに自らについて語ることが想定される。教授者から発せられる *What I like to do in my free time is (to) listen to classical music. What about you?* もしくは *Tell me what you like to do.* などの働き掛けに対して、*What I like to do is reading books.* や *What I like to do in my spare time is (to) see movies.* などの答えが学習者から引き出せるようになると、いよいよ学習も深まりを見せていることが確認出来る。

4.3 方法や手順の説明

直ぐ上で見た疑問詞節を用いることによって表現の範囲が大きく拓かれるのは、何かを行う方法やその手順の説明であろう。このことは、物の使い方やゲームのルールなどを扱うことによって、英語表現の学習と会話の練習がどのように進められ得るかを考えてみると一層はっきりする。最初に、フォークとナイフの使い方を説明する場合を例に取ってみよう。教授者は、(5a)のように言いながら、学習者にフォークとナイフを示し、それぞれが何であるかを確認してもらった後、その使い方を問う。学習者の反応がある程度出揃うまで待った後、(5b)のようにいわば答え合わせをして行く。中級以上の学習者に対しては、(5c)のような言い回しを用いるのがより効果的であろう。

- (5) a. Do you know this[what this is]? Yeah, it's a knife. And what[how]about this? Yeah, it's a fork. So do you know how to use them[the knife and fork]? Tell me how you use them.
- b. You take[have]the knife in your hand like this. This is how you hold it in your hand. And how about the fork? You take[have]a fork like this in your other hand. This is how you hold it in your hand. Yeah and you use the knife and fork together like this. This is how you use them.
- c. You hold the knife in your right[left]hand. Put your index finger straight on the base of blunt side of the blade like this. So this is how you hold it in your

hand. And how about the fork? You hold it in your left[*right*]hand with the tines facing down like this. Yeah and you use the knife and fork like this. This is how to use them.

実際に説明の対象となるものを手にして説明をする場合は、このように *like this* を用いて実演が出来るのが利点である。言葉による細かい描写は全て省いて、実際に使って見せながら、日本語で言えば「こう」と言いたいときの気持ちで、それぞれの局面において *like this* と言い添えれば十分である。これにより学習者は、この実演を伴う発話に万能な表現に慣れ親しむことが可能となる。

更に、何か食べ物を導入して、学習者に (6a) のような言葉を投げ掛けたらどうだろう。食べ物を押さえる動作をして見せながら、*You do like this*. あるいは *What you do with the fork is like this*. のような反応が返ってくれば至高である。その場合は、*You cut the food. That's what you said, right?* または *What you do is cut the food. Is that what you wanted to say?* と応答することで、疑問詞節を含む表現に一層多く触れてもらうことが出来る。併せて、*hold* や *cut* のような動詞を導入したり、再確認したりすることも可能になる。(6b) のように答え合わせをするのも良からう。

- (6) a. Here is some food. It's what you eat. Then tell me what you do with a fork. And tell me what you do with a knife.
 b. What I do with a fork is hold the food. I hold it like this. And yes, as you know, what I do with a knife is cut the food. I cut the food like this. And I eat it like this.

ジャンケンを説明する場合はどうだろう。*You know janken, don't you? Could you tell me what Janken is?* と学習者に発問することから始めてみるとしよう。やはり、身振り手振りを交えて、懸命に説明しようとする学習者もいるかも知れない。*What you are trying to say is gu, choki, and pa, right? The question is how you say them in English.* などと促すのも良からう。ある程度の時間を取って、学習者に考えてもらった後、*This is how you say gu, choki, and pa in English.* などと言って (7a) の表現を発しながら

グー、チョキ、パーを実際に作って見せて行く。

- (7) a. This is rock. It's like this. This is scissors. It's like this. And this is paper. It's like this.
 b. If you have rock and scissors, rock wins. That is, rock beats scissors. But if you have scissors and paper, scissors win. So scissors beat paper. But if you have paper and rock, paper wins. That is, paper beats rock.

続いて、*Can you tell me how janken goes? Tell me who wins when?* などと尋ねるのも良からう。やはり、学習者からジェスチャー混じりの発話が提示されるのが望ましい。それらに、*OK, I do know what you want to say.* あるいは *Yeah, I do understand what you're doing.* などと学習者の努力に理解を示し、*OK, what you're saying is probably this.* のように前置きした後、(7b) のようにジャンケンの概要を表現するのはどうだろうか。これにより、「勝利する」という意味の自動詞 *win* と、打ち負かすという意味の他動詞 *beat* に触れてもらうことが可能になる¹²。

5. おわりに

本論は、日本語や韓国語のような東洋語を母語とする EFL 学習者が英語のスピーキング技能を効果的に身に付けるために有効な手立てとして、RCG (Radical Communicative Grammar) と称される考え方を略述した。その基本を成す具体的な内容として、広義の語用論的標識並びに主(助)動句の二点を取り上げ、それらが極めて重要であることを指摘した後、実践的発話練習の事例として、自己紹介と他者の紹介、趣味への言及、方法や手順の説明の三つを取り扱った。

英語に限らず、会話をするという事は、一般に対話 (dialogue) をする合間に独話 (monologue) を発しているものと理解されている。対話を構成する発話こそが会話の本質であり、独話を構成する部分は本来会話にとって余分な発話であるとする見方が一般的である。しかし、RCG は、これとは反対の見方を取り、会話は独話を続ける合間に対話が行われることによって成り立つとする立場を取る。会話に従事する話者 (話し手・聞き手と呼ばれる存在の双方) は、発話を行ってはいようがいが、常に何らかの思考を続けており、それを時に (話者によっ

ては頻繁に) 実況中継する。これが、いわゆる独話的要素に相当し、多くは広義の語用論的標識で言語化される。その合間で、話者は、そうした思考の中から、聞き手と共有したいと思う事柄(認知言語学で言うところの概念化)を選び、言語化することで、対話的な発話を発することになる。

このように、通常とは正反対とも受け取れる見方に依拠することによって、会話というものの本質と現実的な有り様が捉えられる。語用論的標識を適宜自由に操れるようになることで会話を継続する技能を身に付けることが出来、伝達内容を紡ぎ出す上で原初的な文法的単位となる代名詞と助動詞(ないしは動詞)からなる、ひとまとまりの主(助)動句を駆使することに慣れることで、英語コミュニケーションの基本的な運用力を獲得することが出来る。EFL学習者は、これらの技能により、英語で対話を始め、続け、上手に立ち止まりながらも、また首尾よく歩き始め、それと同時に、具体的な伝達内容を英語で表現するための根源的な力を手にすることになる。その意味で、本稿が提案するRCGの初歩的な要素は口頭による英語コミュニケーションの重要な基礎を構成すると言える。

謝辞

英語の自然な例文を準備するにあたって快く相談に乗って下さった Walter Klinger 先生、Martin Hawkes 先生に心よりお礼を申し上げたい。特に、Klinger 先生は筆者等から数次に渡って届いた内容の込み入った質問メールにも根気強く丁寧にご回答下さった。ご教示頂いた見解および関連資料の理解に誤解があるとすれば、偏に筆者等の責任であることを申し添えておきたい。

註

- この日本語の表現を韓国語で表現すれば、*eo... issjanha geu... mweoralgga... geuge... mweonga... ireon...* のようになるが、日本語の場合とは対照的に、話者が発話内容に相当自信がないというのでない限り、韓国語でここまでの言い繋ぎが生じることが稀だと思われる。
- 「その都度組み立てられるのではなく、既にある程度は予め一まとめにして蓄えられている」句として、ここで想定されているのは、Hopper (1998: 167) の言う “prepatterned, prefabricated

aspects of speech” に相当する。

- Leech & Svartvik (1994: 11) は、false starts の他に、silent pauses、voice-filled pauses、repetitions、fillers、short forms を informal talk の典型的な特徴として挙げている。
- ここで言う stream of consciousness は、心理学や文芸批評などにおいて用いられる概念と無関係ではないが、この表現を用いる際に筆者等の念頭にあるのは、内的独白 (internal monologue) と呼ばれるものを含む、話者の意識に生起する概念化 (日常的な言葉遣いをすれば、去来する思いや考え) の連鎖である。
- この状況は、フランス語の二人称単数の敬称には複数の形式 (*vous*) が転用され、ドイツ語の二人称単数の敬称には単数女性の形式 (*Sie*) が転用されること、アイヌ語でも一人称複数包括形 (*an=, =an, a(n)oka(y)*) や二人称複数形 (*es=, esokay*) が二人称単数の敬称に転用されることと類似している。異なるのは、英語の *you* が単数で用いられる際に、以上の言語のような敬称という要素を失っているという点である。
- It'm* は英語の音韻体系から考えて生じ得ない。支えの母音が必要なため、*It* と *am* の共起形は *It am* に限られる。
- ここで「主(助)動句」と呼ぶ要素がコミュニケーション上の主要な一単位となるという立場は、Halliday (1994: 72) が “Subject” と “Finite operator” からなる “mood” を機能的文法体系中の “clause as exchange” の主要な要素と認めていることと相通するものであると筆者等は考える。同じ箇所 Halliday は、Subject を “a nominal group” の一つと定義し、nominal group 一般については 6.2 で詳しく述べているが、対話による遣り取り (exchange) の本質的な側面を描き出すために用いている例 (pp.69-71) では、Subject がいずれも代名詞になっている点に注意されたい。なお、ここで提案する主(助)動句に基づく教授法は、動詞とその補部 (complement) が先ずは動詞句 (VP) を構成し、その後主語とまとめ上げられて節 (clause) を構成するという生成統語論的分析と矛盾するとの議論も予想されるが、構成素の組み上がり方に融通性 (flexibility) が認められることは認知文法 (Langacker 2008: 7.4 *inter alia*) でも指摘されている。

- 8 一人称の疑問文並びに二人称平叙文は、一般に *Can I ask you a favor?* (お願いしたいのですが)「依頼」、*You can do it!* (大丈夫だよ)「激励」のように、いわゆる間接発話行為 (Indirect Speech Act) と解されるものが多数を占め、慣用表現化の度合いが高く、文字通りの事態描写ではない。そのため、第三者への報告といった英語活動への展開は出来ないのである。同じ理由で、*You are so kind.* は事実を述べているとも解せる一方で、一般には「感謝」を伝える発話行為としての発話と理解される。それに対して、第三者に対する *She is so kind.* という発話はあくまでも事実ないしは評価の叙述であり、感謝を伝える発話行為とは質的に異なるものになる。
- 9 学校で言えば、小学校の外国語活動のように年少の児童が学習者となる場合、中等教育においても、書き言葉としても英語を著しく苦手とする生徒を対象とする場合、あるいは大人の EFL 学習者でも一から英語を学び直すというような条件にあっては、ここで述べることは少なからず当てはまると思われる。
- 10 *I love it here.* は、*I'm fond of it here.* と *be* を用いた表現で言い換えられなくもないが、*fond* を用いることで *love* や *like* に比べて簡素で少ない知識・技術という条件を満たすとは必ずしも言えないため、ここでは触れない。
- 11 この点については、*Introduce Yourself in English in 30 Minutes* というタイトルの英語母語話者による YouTube 動画の中で極めて分かりやすく説明がなされている：
- Many of my students say, "What is your hobby?" But that's not something that native speakers will say. No native speakers say, "What is your hobby?" Instead, we ask, uh... "What do you like to do?" or "What do you do in your free time?" This is a much more natural question than "What's your hobby?" The answer to this then is "I enjoy" or "I like" plus a noun phrase. So for example, "What do you like to do?," "I like listening to music," or "I enjoy listening to music." "What do you do in your free time?," "I like watching movies." (10 lines *You Need for Introducing* の 7 番目の項目 *I enjoy...*; 筆者等による transcription)
- 12 中級以上の学習者に対しては、*beat* の代わりに *defeat* を用いることも有効であろう。いずれにし

ても、これらの動詞が *win* と同様に日本語や韓国語において *katsu*, *igida* のように同じ動詞を用いて訳されたり、説明されたりしやすいにも関わらず、動詞補部 (complement) に競争相手を取るのか、試合などの名詞を取る (あるいは一切取らない) のかという点で対照的であることを知る機会を提供することが重要である。

参考文献

- Halliday, Michael A. K. 1994. *An Introduction to Functional Grammar*, Second Edition. London: Arnold.
- Haselow, Alexander. 2016. A processual view on grammar: macrogrammar and the final field in spoken syntax. *Language Sciences* 54: 77-101.
- Heine, Bernd, Gunther Kaltenböck, Tania Kuteva, and Haiping Long. 2013. An outline of discourse grammar. Jany, Carmen, Shannon Bischoff, and Volker Gast (eds.), *Functional Approaches to Language*, 155-206. Berlin: De Gruyter.
- Heine, Bernd, Tania Kuteva, and Gunther Kaltenböck. 2014. Discourse grammar, the dual process model, and brain lateralization: some correlations. *Language and Cognition* 6: 146-180.
- Hopper, Paul J. 1998. Emergent grammar. Michael Tomasello. (ed.), *The New Psychology of Language: Cognitive and Functional Approaches to Language Structure*, 155-175. Mahwah and London: Lawrence Erlbaum Associates.
- Izusu, Katsunobu and Mitsuko Narita Izutsu. 2017. Mental gaze monitoring and form manipulation: distinct conceptions of language production and its management. *Lege Artis. Language Yesterday, Today, Tomorrow*, vol. 2 (2) : 47-96.
- Kaltenböck, Gunther, Bernd Heine, and Tania Kuteva. 2011. On thetical grammar. *Studies in Language* 35: 852-897.
- Kaltenböck, Gunther and Bernd Heine. 2014. Sentence grammar vs. thetical grammar: two competing domains? Brian MacWhinney, Andrej Malchukov, and Edith Moravcsik (eds.), *Competing Motivations in Grammar and Usage*, 348-363. Oxford: Oxford University Press.
- Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press.

- Leech, Geoffrey and Jan Svartvik. 1994. *A Communicative Grammar of English* (2nd ed.) . London and New York: Longman.
- Maynard, Senko. 1993. *Discourse Modality: Subjectivity, Emotion and Voice in the Japanese Language*. Amsterdam: John Benjamins.
- Onodera, Noriko O. 2004. *Japanese Discourse Markers*. Amsterdam: John Benjamins.
- Shinzato, Rumiko. 2007. (Inter)subjectification, Japanese syntax and syntactic scope increase. *Journal of Historical Pragmatics* 8: 171-206.
- Tagliamonte, Sali A. 2019. How do you start a sentence?: charting the left periphery in English dialects. A paper presented at the 16th International Pragmatics Conference, Hong Kong, 10 June 2019.

参考資料

- Learn Easy English--Self Introduction in English. (<https://www.youtube.com/watch?v=AGiLUyWvLPI>)
- Introduce Yourself in English in 30 Minutes (https://www.youtube.com/watch?v=5Vf57_dehFo)